旧制松江高等学校教師

カルシュの足跡を追って

——若松　秀俊

◇32◇

講義録から（下）

カルシュも楽しみつつ授業

宮田正信のノートからは、当時の大学の受験期の様子も推測できる。

一九三二（昭和七）年の正月明けから三月初めにかけては、和文独訳の連続であった。これはおそらく教頭でドイツ語主任の、高畠教授あたりの要望によるものであったろう。近づく帝大受験に備えての入試問題集によった特訓であった。カルシュが前年九月に帰任したころから、そろそろ始まっていた。それが十一月の一カ月間の空白をうけて、年明けとともに急に厳しくなったものであろう。ストライキによる授業放棄の後であったからである。

ところでドイツ語の問題には、ちょっと首をかしげるような詰屈（きっくつ）たる文章が少なくなかったようだ。先生もいろいろ苦労したことと思う。もちろん他の同僚の支えがあったには違いないが、それにしても大変だったと推測される。授業はまず問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が生徒と一緒に翻訳するという手順で進行した。

しかし、これが実際の大学入試にどれほど役立ったのかは何とも言えない。それより第二学年からは生徒それぞれに、短い自由作文をドイツ語に翻訳する宿題を毎週課していた。それを次週の時間の初めに試験用紙を配布し、清書の後に提出させた。

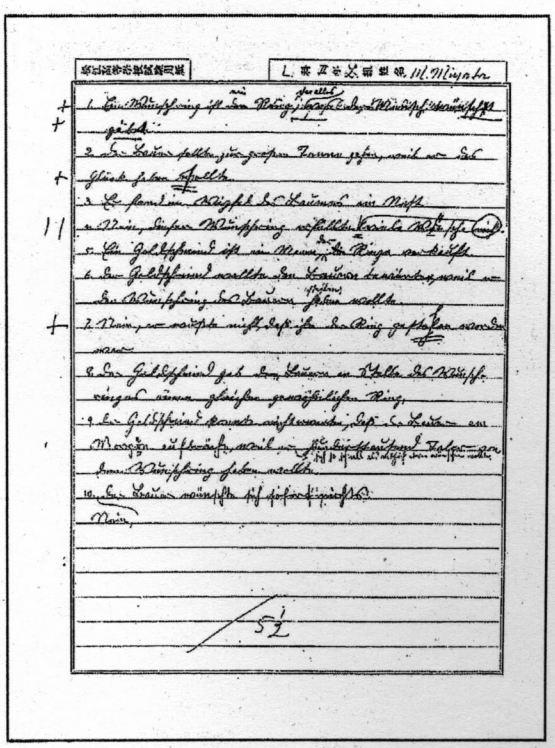
そのあとで前週提出した分に先生が丁寧に添削したものが、生徒の一人ひとりに返却された。そして、必要に応じて個人的に批評をもらった。生徒にとっては型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく、しかもドイツ語が実際に身についたかしれない。

卒業以来七十余年の空白ですっかり忘れられていたが、たまたま宮田正信のノートに挟み込まれて残った答案が見つかった。指導の様子とともに懐かしい先生の筆跡を今に伝えている。宮田は「いささか面映ゆいが、これも併せてお目にかける決心をした」という。この独訳答案の内容とノートに残っている紋切型の入試問題集の独訳と比べてみると、問題集の方は目先の功利一点張りで無味乾燥である。もしかして、先生もあまり気が進まなかったのではなかろうか。

それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、生徒たちがそれぞれ勝手な自作の文章を翻訳して差し出した稚拙な文章の方を、どんなにか先生は楽しんだことだろう。たまに「グート」などの評価をもらうと、とてもうれしかったという。

その他、このノートの断片記録からうかがわれるように、平常の講義の話題はまことに多彩である。例えば南ドイツの方言の話など、ほかでは聞けない話題を残している。

ところで三回にわたった講義録の内容は、平成十二年十一月十日付で筆者あてに送られた九期文乙の宮田正信の書簡と、電話などでの会話の内容によるものである。その



カルシュの添削が施された宮田の答案

彼がこの四月に逝去したことを大阪の同窓会より、間接的に知らされた。宮田が今ごろ天国で、生前から慕っていたカルシュと眼鏡の縁に手をやりながら、遠い昔の日々を語り合っている姿が目に浮かぶようである。

これまでカルシュ博士顕彰に多大の情報を寄せてくれた、筆者にとっては特別の存在であった宮田正信、岡崎道夫、白石磷の三氏とともに多大のご支援を賜った増田義哉、遠藤捨雄、田島康弘の三氏の冥（めい）福を心より祈りながら、本シリーズをひとまず終える次第である。

なお、カルシュ博士については、生徒との交流の記録、数々のエピソード、異国文化の紹介、軽井沢での生活、大使館勤務時代、さらにドイツ帰国後の生活、日本との絆と再来日の様子など、多岐にわたって調査済みであり、その内容が筆者の手元に山積している。

最後に、調査に協力し、また数々の資料を提供してくださった関係者に心より感謝の意を表するとともに、この大きな足跡を松江に残したフリッツ・カルシュ博士が、人々の公平な目の高さから評価されることを心より願って筆を置くことにする。

（東京医科歯科大学大学院教授）

＝文中敬称略＝

（おわり）